東北 VALUE SIGHT 山形

松尾芭蕉が詠んだ「閑さや　岩にしみ入る蝉の声」の句で知られる山寺（正しくは宝珠山立石寺）は、慈覚大師円仁が開山したとされ、山形県内でも有数の観光地となっている。その境内に、立石寺とはまた異なる意義のある建物「山寺行啓記念殿」がある。山寺観光ボランティア「きざはし会」の新関会長をはじめ、関係者の人々は、山寺の歴史を伝える重要な建物として、たくさんの人々に知ってほしいと考えている。

山寺観光ボランティア「きざはし」会　会長

新関　孝夫（にいぜき・たかお）

山形大学教育学部卒業。1998年３月まで教職に従事。退職後、山寺地区振興会各種役員職（1999年４月～2006年３月）を務めるかたわら、「観光山寺づくり」、「山寺の郷土研究」等について活動。現在は、山寺行啓記念殿維持管理支援会会長、山寺行啓記念殿山形市文化財指定・修復完成記念事業実行委員会会長などを務める。

主な著作に「荒谷風土記　監修･編集」「祈りの山寺」、「伊澤栄次著　山寺の歩み（明治・大正・昭和期）復刻」などがある。

山寺観光ボランティア「きざはし会」
山形市大字山寺4388番地
TEL 023-695-2614

山寺の歴史的建造物「山寺行啓記念殿」～山形市有形　文化財に指定～

山寺行啓記念殿、山形市指定有形文化財に

「地域づくり・まちづくり」は、その歩み（歴史）が培ってきた「誇り」を中核に進められる活動でありたいと思っている。どなたも「誇れるものがたくさん存在する地域（まち）に住みたい」と思っているはずである。私は、多くの文人墨客が訪れ「よいしょ（褒める）」してくれた山寺に生まれ育てられてきたと思っている。山寺に住む一人でも多くの方に「よいしょ（褒める）づくり」の活動をつなげていってほしいと願っている。

山寺には、伊澤三右衛門不忍栄次氏という「山寺を誇りにし、こよなく山寺を愛した『山寺人』」がおられる。氏は山寺の「温故知新」の視点となる著述、史料を数多く遺してくれた方である。その一つが、宝珠山立石寺境内山上に存在する山寺行啓記念殿の資料である。

明治41（1908）年９月18日、東宮嘉仁（よしひと）親王（後の大正天皇）が山寺に行啓なされた。その際の小休止のために建てられた行在所（あんざいしょ）は、京都御所紫宸殿（ししんでん）を手本としてつくられた建物である。100余年後の現在、ほぼ原型のまま、大小50余の堂塔伽藍（とうとうがらん）と一体となり、ふもとからの立石寺の境内景観に奥行きを感じさせる重要な要素になっている。その座敷からは殊の外の絶景が堪能できる。

行在所は、山寺行啓を実現させた当時の東村山郡（天童・中山・山辺町、地元山寺村）の先人達の強い思いを伝える建物で、現在『山寺行啓記念殿』と呼ばれている。

行啓後、山寺は名勝及史跡指定（昭和７年）され、仙山線敷設が実現（昭和12年）した。行啓を契機として「観光山寺」の交通アクセス基盤が整備されたといえる。

平成28年11月21日、山形市議会観光振興議員連盟の支援を受け、記念殿は82件目の「山形市有形文化財」に指定された。

行啓は山寺の危機を救い、行在所は行啓のシンボルとして記念殿に

明治初期、山寺は２つの経済基盤を失った。

明治４年の「上地（あげち）」政策で大混乱に陥った。立石寺は上地命令で寺領からの年貢が激減し、境内の八院が廃寺となり、11坊が帰農を余儀なくされた。さらに、山寺と仙台秋保をつなぐ二口峠の交易料（荷駄、人）が激減し、山寺経済は極度の苦境に陥った。村民の生活は著しく窮乏し、多くの離村者を生む事態となった。

そんな中、立石寺住職・壬生芳田氏、山寺学校長・伊澤栄次氏、干布村初代村長・今野有石氏（東村山郡会議理事）の三氏をリーダーに、知事・行啓招致関係者の熱意に支えられ、計画になかった東宮嘉仁親王の山寺行啓招聘で「新たな山寺づくり」を実現しようと総力を結集し奔走した。

行啓に関する整備のすべてを30数日間の突貫工事で完成させていることからも、当時の人々の強い思いが伝わる。難航していた山形・山寺線は県道に昇格。山寺地内の村道も急ピッチで整備された。

行啓当日、東宮嘉仁親王殿下は「もう一度来てみたい」と仰せられたという。このお言葉が、その後の「観光山寺づくり」の弾みとなった。

行啓翌日から10月３日の14日間、行在所は一般公開され、前代未聞の関心を集めた。県内外からの参詣客は、山寺への交通アクセスの整わない中、天童駅、出羽駅、山形駅から徒歩、人力車、馬車で来山した。数万の参詣客が、蟻の行列のように押し寄せにぎわったという。

「記念殿調査報告」が「記念殿」を救った

100余年の時の流れと戦後の混乱の中で、記念殿は、所有管理体制がやや曖昧になった。郡制廃止（大正10年）により施主『東村山郡』が無くなる事態が生じた。さらに通常の維持管理の人手不足やメンテナンス費用のかさみ、記念殿のもつ「山寺づくり」の記憶が薄れるなどの問題が生じた。

山寺天童行幸史蹟保存会は『100周年記念式典を開催し、記念殿を解体する』ことを、平成19年11月21日に確認するという事態になった。この解体危機から記念殿を救ったのは、平成21年５月、同会が東北芸工大志村直愛（なおよし）教授・山形工科短期大学校小幡知之教授に依頼し実施した「記念殿総合調査」だった。

この報告書により記念殿の価値を再確認し、立石寺、関係所管、地元山寺の諸関係団体等で保存・維持・管理の協議を重ね、立石寺から記念殿保存の意向を固めていただくことができた。平成24年10月17日、立石寺が管理主体となり、山寺の各種団体で維持管理支援会を結成、協力体制を確認し、解体の危機を脱することができたのである。

歴史上極めて貴重、日本近代史、建築史の研究にとって大きな意義

報告書にまとめられている記念殿の「文化財としての価値」をあげてみる。建築年代が明確で、意匠、構法、資材が優れていること、行啓建築物として大正天皇縁の建物で、日本近代史、建築史の研究にとって大きな意義をもっていること、後の大正天皇行啓のためだけに建てられたもので全国的にみても山寺だけにしか存在しないこと、建築に携わった関係者58名の氏名が特定できることなどがある。建築史・地域史上、極めて重要な意味を持つ建物と評価される。

山寺は、この経過を記憶と記録に、永く固く留めおかねばならない。

一昨年から、年１回の一般公開を実施、映画（「３月のライオン」）やテレビの番組撮影場所としても活用されてきている。平成29年９月には、山形市有形文化財指定記念事業が企画実施される予定である。

市指定文化財として、趣向をこらした定期的な公開、広く市民の願いにかなった活用が、今後、期待されている。

行啓記念殿からの眺望